



全国に広がる Honda の高校生交通安全教育活動 連載:第7回

高校の先生方が生徒への交通安全教育を実施できるようにするために



「8の字走行」では、お互いがスムーズに走行するためにはどのような行動をとるべきか、先生が生徒に問いかける



「反応回避」では、先生が上げた手と逆方向に回避。1回目の携帯電話使用や傘をさしての片手運転では、バランスを崩したり、転倒したりするなど安全に回避できないことを体験してもらう

実技による 自転車教育で 生徒の行動が変化

このコーナーでは、ホンダが全国で取り組んでいる高校生交通安全教育を取り上げている。今回は兵庫県立伊丹西高等学校と、群馬県立下仁田高等学校での事例を紹介する。両校とも昨年、本田技研工業(株)安全運転普及本部鈴鹿普及ブロック、埼玉普及ブロックがそれぞれ交通安全教育を実施しており、今年は2年目となる。

伊丹西高校での交通安全教育は7月9日、1年生320名を対象に実施された。同校生徒指導部長の太前淳教諭は「当校では生徒の95%が自転車通学しています。生徒の自転車マナーに関する近隣からの苦情は長年の課題でした。昨年、ホンダの

実技による自転車教育を行ったところ、それ以降、苦情は減り、今ではほとんどありません。これは予想外の結果でした。命を守るために、交通安全は重要なことだという私たちの思いを生徒一人ひとりが感じとり、意識が変わってきた結果だと思います」と話す。同校ではこうした効果が認められたことから、今年も開催を決めた。昨年はホンダのインストラクターが座学、実技とも指導したが、今年は実技を生徒指導部と1年生のクラス担任の先生方が担当した。実技のプログラムは、「反応回避」と「8の字走行体験」である。



「反応回避」では、先生に向かって生徒が自転車を走らせ、先生が上げた手と逆方向に回避する。1回目は片手、2回目は両手で運転。携帯電話の画面を見たり、片手で運転していると、自分が思うように回避できないことを生徒に実感してもら



8の字の交差する箇所ではお互いの動きをよく見て譲り合うことが必要になる

「8の字走行体験」は、直径10mの円をつなげた8の字コースを自転車で走行。1台ずつ順々にコースに入り、20台がコース内を走行できたから終了だが、最初のうちは、なかなか上手くない。先生は生徒を集め、「20台がコース内でスムーズに走行するためには、どうしたらいいか」生徒に問いかける。その中で、他の自転車の動きをよく見て、アイコンタクトや声をかけながら譲り合えることが大切であることに気づかせる。これらを実践することで、コース内を20台で走行することができた。最後に、先生は「自分だけではなく、相手のことを思いやれる心の余裕を常に持つことが大切です。今日、体験して学んだことを実生活の

生徒自身で今後の 行動目標を導き出す

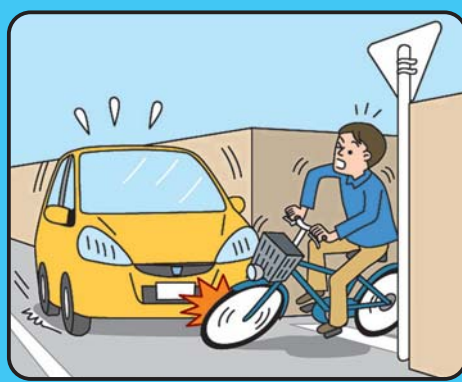
中で活かしてほしい」と強調し、実技は終了した。「指導のポイントなど細かいノウハウについては、ホンダから提供があったので、私たちでも実技指導ができました。そして、生徒たちが声を出すなど積極的に取り組む様子も確認できました。こうした良い流れを今後も継続していきたいと考えています」と、大前教諭は今後を見据える。

一方、下仁田高等学校では6月11日に1年生60名を対象に感受性教育が実施された。感受性教育とは、実際に起きた中学生・高校生の自転車事故の事例などをとらえて生徒同士が話し合うことで、安全意識の向上を図るものである。昨年はホンダのインストラクターによって行われたが、今年と同校の田島慶一教諭も指導に加わった。

「単なる講話やビデオの視聴だけでは、生徒の記憶になかなか残りません。この感受性教育は生徒が主体的に考えるプロセスがあるので、生徒に印象づけることができると思います。また、交通安全は自分たちの経験をもとに生徒同士で話しやすいテーマです。こうした授業は、コミュニケーション能力を高めるトレーニングにもなります」と田島教諭はいう。

授業の冒頭では、ホンダのインストラクターが生徒に「なぜ交通安全を勉強するのか?それは、自分の身は自分で守るとともに、人に迷惑をかけた時、ケガを負わせないようにするために」と、交通安全教育の意義を説明。続いて、田島教諭による感受性教育が始まり、ホンダの中学生・高校生向け自転車教育用ワークシートを使って授業が進められる。取り上げたワークシートは「交差点での交通事故」(下記参照)。設

●田島教諭が使用したワークシートの事故事例=交差点での交通事故「Aさんが自転車で、見通しの悪い一時停止標識のある道路から飛び出し、交差点に進入。クルマと出会い頭に衝突した」



ワークシートに自分の考えを記入した後、班に分かれてグループ討議を行い、代表者がその結果を発表

定場面と事故の経緯を説明し、生徒が「この事故がなぜ起きたのか」「事故を起こす直前の自転車利用者の心理状態」「事故が起きると、後々どんな影響が出るか」を考え、ワークシートに記入する。そして班に分かれ話し合い、各班の代表者が発表する。

事故の原因は「自転車利用者が一時停止をしていなかったから」「見通しが悪いのに、左右を確認するなど注意が不足していたから」「自転車利用者の心理状態は「急いでいて、何も考えていなかった」「クルマは来ないだろうと思っていた」、事故の影響は「自転車利用者がケガをして後遺症が残る」「最悪の場合、死んでしまう」という意見が多くを占めた。最後に、班ごとに交通事故防

止に向けた決意をボードに記入し、クラス全員に表明し、終了となる。

授業を終えた田島教諭は「小・中学校で交通安全教室を経験しているので、生徒は交通安全の知識を持っています。それを行動につなげるためには、私たちが押しつけるのではなく、生徒自身が考え、話し合ったことに基づいて「今後、どのように行動すべきか」という結論を導き出してもらいたい」と話している。その意味で、感受性教育は効果的な内容だと思えます」と感想を語った。

このように2年目を迎える高校に對しては、先生方によって交通安全教育が実施できるようにホンダが継続的に支援している。



最後は班ごとに交通事故防止に向けた決意をボードにため、クラス全員で共有

※ワークシートと指導案は以下のホームページよりダウンロードが可能(無料)。
<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/junior/>